

## 別紙 4

報告番 -	※ -	第
----------	--------	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

Interpersonal Acceptance-Rejection and Adolescents'  
Positive Outcomes

氏 名

AKTAR Rumana

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、対人的受容－拒否理論 (IPAR 理論: Rohner 1975; Rohner & Lansford, 2017) をもとに、両親と両親以外のアタッチメント対象からの受容と拒否が、青年期の学業面、心理的かつ社会的発達のアウトカムに担う役割について論じた。主な目的は、IPAR 理論の中核的想定を日本文化圏で検証し、複数のアタッチメント対象（母親、父親、親友と教師）からの受容と拒否が、青年期男子と女子の望ましい発達（学力、本来感、精神的健康、向社会的行動）に担う役割を調べることである。

ひとは一生涯において、感情的な欲求や重要他者から肯定的な反応（もしくは受容）欲求を満たそうとする (Bowlby 1969, Rohner & Lansford, 2017)。IPAR 理論は、エビデンスに基づく社会性と生涯発達の理論で、アタッチメント対象による受容欲求の充足と欠乏の発達の効果を広く説明している。そして、対人関係の受容と拒否を温かさ／愛情の対極に位置づけ、ひとは自分がアタッチメント対象に受容されるか、それとも拒否されるかについて、人種、文化、ジェンダー、社会的地位に関わらず、主に4つの方略——温かさと愛情、冷たさと親愛の不在、敵意と攻撃性、無関心とネグレクト、未分化された拒否——で理解するとした (Rohner & Lansford, 2017)。しかし、日本ではまだ IPAR 理論を支持する研究知見がない。そこで、本研究では、IPAR 理論の基本的理念を日本で検証することを目的とした。

青年期は、内分泌系、認知機能、感情、行動と対人関係を含めて、身体的に大きく変容する重要な発達時期である (Žukauskienė, 2014)。青年期には、受容欲求が複数対象（両親と両親以外）に分岐するが、大半の研究は両親か、両親以外の関係性に限定し、青年期の発達のアウトカムとの関連を調べてきた。さらに、青年期の発

達に及ぼす両親の役割を調べた研究は、ほとんどが母親との関係性に注目しており、父親の役割は見過ごされている (Cabrera, Brenda, Volling, & Barr, 2018)。青年期の問題に焦点を当てたアウトカムや精神疾患が研究対象とされてきたが、最近の動向では、青年期の望ましい発達のアウトカムを促進することは、精神疾患や否定的なアウトカムを予防することよりも重要と認識されている (Allen, Kirschman, Seegan, & Johnson, 2017; Larson, 2006)。しかし、両親や両親以外からの受容や拒否が、青年期の望ましいアウトカムにどう影響するのかほとんど分かっていない。そのため、本論文はこの不足している知見を検証することを目的とした。

第1章は、対人的受容－拒否理論 (IPAR 理論) の概念、基本的な考えと主要な心理尺度について説明している。そして、次節では、青年期の対人的受容－拒否の役割と望ましい結果について議論している。まず始めに両親からの受容－拒否と学力に関する先行研究を紹介する。次に、両親からの受容－拒否、本来感と精神的健康に関する先行研究を報告した。さらに、青年期の教師からの受容－拒否と本来感の先行研究を概観した。最後に、両親、親友、教師からの受容－拒否と向社会的行動に関する先行研究を紹介した。

第2章は、両親の受容－拒否と青年期男子と女子の学力の関連を示した(研究1)。先行研究は青年期の学力には両親の受容が重要であると指摘し続けているが、ほとんどの研究は母親の役割のみ検討している(例:Lai & Vadeboncoeur, 2013; Sheng, 2012)。父親と母親の役割を検討した研究は少数だが、一貫しない結果が報告された(Khan, Haynes, Armstrong & Rohner, 2010; Uddin, 2011)。この研究では、母親と父親の受容と青年期男子と女子の学力の関連を調べることを目的とした。対象者はバングラデシュの6年生と9年生であった。その結果、母親と父親からの両方の受容が学力と有意に関連していることが示された。

第3章は、日本の文脈における Parental Acceptance-Rejection Questionnaire (Child PARQ) の妥当性と、両親の受容－拒否、青年期男子と女子の本来感と精神的健康の関連を示した(研究2a)。Child PARQ は IPAR 理論の主要な尺度で、理論の中心的仮説(個人は4つの具体的方法の組み合わせで母親と父親からの受容－拒否を意識する)を調べるために開発された。短縮版 Child PARQ には、母親(24項目)と父親の受容(24項目)の両方が使用された場合に項目数が多く、回答者にとって負担や不注意につながる可能性があるという課題がまだある。また、子どもを研究している日本の研究者は、尺度の長さが方法的に問題である場合、フィールドデータを集めるのが困難となっている。この研究は、母親用と父親用の Child PARQ (短縮版) を日本文化圏に適用し、構成概念妥当性を調べることを目的とした。また、この研究はオリジナル版と同等の母親用と父親用の短縮版を開発することも目的とした。青年の本来感が、両親(母親と父親)の受容－拒否と青年の精神的健康の関係を媒介するという仮説を調べた。対象は、青年期男子と女子603名であった。確証的因

子分析の結果、わずかに改訂した尺度の4因子構造が支持された。項目応答理論に基づいた分析の結果、母親と父親の18項目版は構造的に同等であることが分かった。構造方程式モデリングで分析をした結果、青年の本来感は、両親からの受容—拒否の意識と青年期の精神的健康の関係を有意に媒介することが示された。

第4章は、教師の受容—拒否尺度 (Child TARQ) の妥当性、および教師からの受容—拒否と青年の本来感の関連を示した (研究 2b)。両親以外の他者との関係において、人びとは両親の場合と同じ4つの方法で受容—拒否を認識しがちであるという IPAR 理論の予測を検証するために、この研究では日本文化において Child TARQ の構成概念妥当性を検討し、オリジナル版と類似した正確性をもつ短縮版を開発することを目的とした。さらに、この研究では、青年が認知している教師の受容—拒否と本来感の関係を調べた。この調査には、603名の日本人中学生が回答した。確証的因子分析の結果、改訂した尺度でも理論的に想定されている Child TARQ の4因子構造モデルが支持された。項目応答理論に基づいた分析では、18項目の短縮版が示された。構造方程式モデリングで分析をした結果、教師からの受容から生徒の本来感への直接効果が有意であり、友人からの受容は部分的にこの関係を媒介した。

第5章は、青年期の複数のアタッチメント対象からの受容—拒否と複数ターゲットへの向社会的行動の関連を説明した (研究 3)。向社会的行動の概念の多くや研究は、向社会的な行為を一般化し、単一の心理学的概念として捉えているが、最近の研究は、特に研究テーマが青年期の向社会性発達である場合、向社会的行動の多面性に焦点を当てている (Padilla-Walker & Carlo, 2014)。若者の良心的な行為の想定しうる予測因子として両親以外のアタッチメント対象 (友人, 教師) との関係性が提唱されているものの (Eisenberg, Spinrad, & Knafo-Noam, 2015), 青年の向社会的行動の予測因子を調べた研究は少なく、ほとんどの研究は両親 (特に母親) の要因に焦点を当てている。

これまでに明らかとなった予測因子には、研究間でバラツキがみられる。そのため、向社会性の発達や予想の本質について一貫性のある理解が難しい。この研究は、青年の複数のアタッチメント対象 (父親, 母親, 親友と教師) からの受容—拒否の表象と複数ターゲット (見知らぬ人, 友人と家族) への向社会的行動の関連について調べた。さらにこの研究は、青年の本来感が受容—拒否の表象と向社会的行動の関係を媒介するか調べた。対象者は日本人の青年 784名であった。構造方程式モデリングで分析をした結果、両親からの受容—拒否から3ターゲットへの向社会的行動への直接効果が有意で、母親からの受容—拒否から見知らぬ人への向社会的行動への間接効果が有意で、親友と教師からの受容—拒否は友人と家族への向社会的行動と有意に関連していた。本来感は、母親と親友からの受容—拒否と見知らぬ人への向社会的行動の関係を媒介していた。

以上の結果より、Child PARQ と Child TARQ の構成概念妥当性を確認することで、

日本において IPAR 理論の基本的理念が実証的に支持された。さらに，青年期のアウトカムにとって両親と両親以外の受容—拒否が重要であることを裏付けた。この研究は，日本人青年の発達——特に，向社会性の発達における父親からの愛情の重要性を示した。また，青年の本来感（望ましい若者の発達を生み出す力）は，個人のウェルビーイングだけでなく，社会福祉を促進する両親と両親以外の受容—拒否に影響されることも示された。